

ルネッサンス期の大學

—「大學の理念」の史的展開(三)—

森

昭

本誌三六七號(二四頁)において私は、大學は發生いらいその都度の世界現實によつて下から基礎的に限定され、その都度の支配的世界觀によつて上から理念的に規定されつつ、その理念と内容と形態とを持續的、變革的に實現してきたと云い、また世界現實と世界觀との意義についても私見を簡単に述べたが、しかし三七二號(一)で示唆したように、むしろ世界を世界現實(民族的「物質」的基礎面に即してつかまれる世界の諸契機とその構造連關)と文化と人間との三つの基本契機に分けておいて、そして世界の全體的哲學的考究が三者の三一的統一としての哲學的世界觀を志向する、と考える方が一そう具體的であり、またかかる考えの方が大學理念の考究においてはより實效的であると思う。かかる考究的視點が、一般に教育を體系的歴史的に考察する際の視點であるべきことについては、近刊の拙著『現代教育の動向と進路』において詳論するから、ここでは詳述を割愛する。

一 ルネッサンス期西歐諸國の大學の概観

ルネッサンス期は中世から近代への轉換的過渡期であるが、この時期の大學を體系的、歴史的に、即ちその理念の歴史的發展において考究しようとする時、從來の大學史では必ずしも十分には自覺的に處理されていない一つの問題に直面せざるを得ない。大學史にはすぐれて歴史的なるものとすぐれて體系的なるものと二つの類型が見られたが、前者は歴史的事實の徹視的な記述に傾き、後者は理念的體系の(類型論的)巨視的な構成に傾いていた。(前者は一

般に各時代毎の大學を主題的に考究するものに多く見られ、後者は現代大學の理念を考究する際に媒介とされる過去の大學の捉方に多く現われている。而も後者では、十八世紀末から十九世紀初に於けて一應の完成に達した近世的の大學、特にドイツ觀念論によつて最高の世界觀的自覺を極めた近世の大學を一つの典型とし、かかる哲學的の大學の理念の没落として現代の大學を捉え、又それに對する反定立として中世の大學を見る傾が強かつたため、近代初頭から十八世紀中葉までと、十九世紀の後半三分の二世紀とは、その歴史の意義を十分には捉えられていないように思われる。かかる見方が取分けドイツ的であることは別として、このような理念的體系的巨視的な構成は、歴史的事實的微視的な記述をも多少とも支配して、例えばルネッサンスの人文主義によつて近代の大學が「おう完成されたかのような錯覺を起させるような記述がなされる場合もあつた（例へば、Schmitz, Geschichte der Erziehung, Bd. 2, 2, Erziehung und Unterricht im Zeitalter des Humanismus, Karl Hurlfelder）にはかかる傾向が見られる）。その場合は一九世紀初頭に「おう完成された大學の理念を、例えば十六世紀の大學に多かれ少かれ讀み込んでゐるのはなからうか。ところが一般の歴史的事實が殆んど一世紀毎に一時期を劃しつつ發展を遂げたなかにあつて、大學がながく中世のスコラの形態を持續したことは歴史的事實が示すところであるように思われる。しかも大學はかかる形態を全く自己同一的に墨守したのではなくて、各時期の「世界」（世界現實・人間・文化）の動向はそのつどスコラの形態を部分的にはあれ融解していつて、最後に近代の大學を實現したのであつた。

右の問題の詳論は割愛して、大學の歴史的・體系的考究に際して私が採らうとする立場を結論的に述べよう。即ち、中世と近代とにおける大學理念の二つの典型を後と前とに巨視的に見据えておいて、云わばその兩理念の光によつて移行的各時期の變化を照らし出しながら取上げ、そしてこれらを擴大的に強調することなく各時期における夫々の限られた役割を歴史的事實に即しつつ微視的に見究め、しかも夫々のなかに、全體として發展的に總觀すれば近代の大學が歸結されるような、理念的志向性を跡付けて行くことにしよう（但し本誌の性格上、歴史的事實の微視的考證は

少からず切捨てざるを得ない)。

中世の特に「中世」的な世界現實は、自然經濟的生産諸關係の物質的基礎と、それによる強い限定ならびに經濟外的(特に、法制的・宗教的)制度や觀念による限定を受けた人と人との階層的依屬關係とを含めて、閉鎖性の強い社會的集團のすぐれて植物的な“summa”的全體として成立つた封建世界現實であつた。しかしこれはより顯著な特徴的性格において見られた、この意味で多少とも類型化された中世の世界現實であつて、これとは反對の、一般に所謂「近世的」なる諸契機もそのつど中世そのものうちに跡付けられるであろう(例へば、地代の金納化、手工業の發達、商人と貨幣經濟の發生、都市の成立、遠距離通商や交通の擴充等々)。そしてこれらの契機は十二・三世紀から發展の速度と時代轉換の角度とを増大し初めたのであるが、しかし必ずしも直ちに時代を「中世」から「近代」への非連續的轉化に導いたのではなく、一方ではかかる方向を潛めながら、むしろ中世の植物的世界に云わば動物的生氣を發生せしめることによつて、中世のより動的な完成に奉仕するという役割を果したように思われる。大學もまたかかる意味の近代的・中世的現實勢力の一つであつて(本誌二六七號)、中世世界の自覺的世界觀的完成の役割を果した。従つてその形態は、近代的契機を自らの完成に奉仕せしめた近代的中世的世界現實によつて強く限定され、又それに極めてアデクエイトな形態であつた。かかる形態をもつ社會的團體としての大學における人間(學徒)の文化的活動もまた、あのような世界現實によつて強く規定された一つの經濟外的活動の、すぐれて中世的な、形態を自ら實現せざるを得なかつた。詳論を省いて結論を言えば、恰も中世的生産様式たる手工業が技術上の傳統主義(Traditionismus)であるのと比論的に、大學的人間の文化的活動も文化上の傳統主義に強く傾き、授業面では既存的文化財の傳達(Tradieren)にほとんど終始した。しかも手工業者や商人が中世的な“Grundherrschaft”から一應自由でありながら、根柢においては中世的秩序によつて強く支配されたのと比論的に、文化の傳達と受容とにおいて一おう自由であり、獨自のユニヴェルシタス的自治權を享有した大學的人間も、根柢においては中世的世界構成の支配

下に置かれていた。そのことは、大學の社會的文化的特權が法王の教書によつて認許されるという、法制的な事實において極めて鮮明に現われていると云えよう。しかもこの經濟外的な教會法制的秩序の普遍的制約が強い社會的實在性を持つていたことは、中世世界の著しい特色の一つであつた。そこでこのことの故に、中世の大學は世界現實から限定されたとは云つても、經濟的基體に直接に根差すと云うよりも、むしろ一種の「實在」としての法制的社會關係によつてこそより強く限定せられた。中世大學の、一々の授業や生活に至るまでの、詳細な制度的規程はこの事實をよく示している。中世大學においては法制化された社會的諸關係よりも、上の上部構造的、世界が勝義の「實在」であつて、高等教育機關 (institution of "higher" education) として大學の「高等性」も、大學が「實在」として意識した世界の上、部構造的、性格と、一面の聯關係を持つてあろう。さて初等教育は一般にその時代・社會の要求の "minimum essentials" (一般には讀・書・算數) をその内容とすると云われるが、この用語を轉用すれば、中世の大學はあのような「實在」的世界の要求の "maximum essentials" をその内容としたと云えるかも知れない。即ち文科の七自由科の一般教養を基底とし、勝れて自然的な世界にかかわる醫學と、勝れて社會的な世界にかかわる法學との兩専門學科、及びこれら三者を中世的 "essentia" (神) にまで "summieren" して中世的世界觀を確立しようとしたスコラ神學とが、その主要な内容であつた。しかも "essentia" は逆に段階的に世界の "existentia" へと自己を開展 (explicitio) するのであるから、神學部以外の教育にもまたスコラ的神學的理念が多かれ少かれ滲透せしめられた。スコラ神學はかくて、中世的世界の上、部構造的、多様 (Vielheit) である一般教養・醫學・法學が一般にアリストテレス的論理によつて捉えた世界そのものの事實的多様を、"essentia" 的の神にまで全收統一 (— summierende Einheit) とでも云うべきか——しつと、その統一のもとに一切の多様を演繹的に體系付ける二元即一元的な神學的、世界觀であり、それがまた中世大學の究極理念であつた。中世大學は中世的世界現實に限定されつつも、"essentia" の觀念的普遍性の方に殆んど決定的な傾斜を示している。そこに我々はすぐれて自覺的形態として見られた限りでの

中世大學の特質を捉え得るのであるが、同時にその形態は、大學の人間の生活から、教育的授業の諸關係、教科内容と教科課程等に至るまでの、組織的制度的形態の全面に、その客觀的定在 (objektives Dasein) を結晶せしめ、しかも大學が享受した一應の自治性は、そのスコラ主義的な自覺的・制度的形態をいよいよ固定的ならしめたのであつた。かくて時代が轉換して、世界現實が變動し文化が發展し人間の在方が變化しても、容易に變化することのないスコラの形態を大學は永く持續することとなつた。

右に概觀したような中世の大學が近代の大學へと移行發展した過程を體系的歴史的に追跡することが、本章における我々の主題である。今は方法論的問題に立入るとまはないが、各時期の大學の内外に現われた思想家の大學教育論や、そのつどの大學の教育内容からのみ、右のような追跡を試みたのが從來の大學史の一般的傾向であるが、私は更にそのつどの世界現實と、そこに生きる人間 (思想家) の文化的・世界觀的自覺にも、視野を擴げて、これらが如何に大學の理念・内容・形態に反映されたかにも注目しつつ、大學の移行的發展を追跡したいと思う。

さて中世の世界においては、中世的世界觀によつて自覺された限りでは、スコラ主義的理性が觀照する “essentia” 的な「精神的 (靈的) 實體、ないし存在 (有)」(coelestis Substantz, geistiges Sein) 即ち所謂概念實在論 (實心論) における、「實在」(realia) より先のものとしての、「普遍」(universalia) が、世界現實と人間と文化との全體をくまなく充填して、多少とも特殊性と個別性とを有するこれらの三契機は、普遍的實體的 essentia の様態としての existentia たるにすぎなかつた。従つて中世大學もまたそのような様態の一つに外ならない。かくて中世大學は理念的にも、そして右に述べた意味で制度的にも、また地理的にさえも、世界的普遍性をその全面に實現していた (三六七號、三二頁をも参照)。普遍主義 (Katholizismus)こそ中世大學の最も著しい特質であろう。近代の大學はかようなスコラの實心論的普遍主義に對する反定立を通じて、漸次その近代性を實現して行つたと云えよう。

即ち中世の主流をなす世界觀的自覺においては普遍的なるものから三段論法的に演繹された世界現實が、近世では、その特殊の現實性をいよいよ發展させ、これに基いて、かつ自覺においては肉の禁欲を強いられた人間が、靈肉を併せ含む全人間性をもつてその個體的主體性を自覺的に主張し初めたところに、近代の發展の成立が見られる。前の形における轉換は中世の世界主義から近代的國民主義への轉換であり、後者は神中心時から人間中心への轉換である。そしてこの轉換と並行して文化もまた人間的・國民的形態を形成していつた。かくて世界の全體を一元的に充填した普遍的 *essentia* から、特殊の世界現實と個體的人間と、そして新しい文化とが解放され、夫々の *existentia* 的な重さ（即ち對自性）において、新しい近代的世界觀の普遍的統一へと媒介されなければならない新しい局面が開けて行つた。従つて新しい普遍はすぐれて實體論的科學的な *essentia* による *summius-entende* *Erkenntnis* としての “*Katholizität*” ではなくて、むしろすぐれて機能的動學的な *Subjekt* のはたらきによつて實現される (*enzyklöpädische*) “*Allgemeinheit*” になければならぬ。この意味での普遍的哲學的世界觀が近代人の自覺面において完成された時、ドイツ的な近代的「哲學的大學」の理念が實現されたのであつた。しかしそこをいたるまでの數世紀の移行期を我々は追跡しなくてはならない。大まかに云つてこの移行期には、十四・五・六世紀のルネッサンス期、十六・七世紀の宗教改革期、十七・八世紀の絶對國家期、十七・八世紀の啓蒙期との、互に連続しつつ而も夫々固有性を持つた四つのエポックを分けることができるであらう。

さて我々は先づ第一のルネッサンス期について、右に概説したような中世から近代への時代轉換の三つの方向と、その都度の三者の世界觀的統一とから、大學の理念と内容と形態とを考究しようとする。

その中世の理念を客觀的形態にまで定在化した中世のスコラ的大學の強固なる *unity* と *solidity* とを、融解し始める最初の酵素は、云うまでもなくイタリヤのルネッサンスにおいて醗酵した。そこでは近代的な國民的世界現實と個體的人間自覺と新しい文化創造との三者が混然として一つになつて、近代への發展の速度と轉換の角度とを飛躍

的に増大せしめた。しかしその酸酵はむしろ大學外の世界から起つたものであつて、カント的に言えば、大學はその外で起つたこの新しい運動の (transzendente) objektive Bedingt に対しては殆んど rezeptiv にふるまうに止まつた。大學がこの客觀的實在を “subjektiver Ideal” な自發性によつて主體的に再構成して、そこに自らの理念を transzendental に實現するためには、カントが大學の内から Philosophieren 始めた時をまたなければならなかつた。しかもこのような哲學的主體性は、イタリヤ・ルネッサンスに觸發されながら各自の國民的世界構造に固有なルネッサンスを實現して行つたドイツ・フランス・イギリス等の西歐諸國における、「近代」の發展を俟つて十八世紀後半に至つて初めて實現されたのである。

まことにルネッサンスは各國において夫々の國民的性格を現じている。ルネッサンスは中世の世界國家的現實からの民族國家の Renaissance であつた。しかしだからと云つてこの時期に一舉に近代の國民國家が完成されたのでは勿論ない。そのための世界現實的諸條件はなお殆んど萌芽的段階に止まつている。むしろこの時期の國民主義的動向は、世界現實の「國民國家」としての完成としてよりも、各國の世界觀的特質において一そうよく捉えられるのではなからうか。ところでルネッサンス期の支配的世界觀は一般に人文主義 (Humanism, Humanismus) であると云つてよい。しかし世界「觀」としての人文主義の面から國民主義への方向を捉えようとするのは、私の本意に反して觀念的考究に陥る危機が少くないのであるが、普遍的觀念的なものが「實在」として意識された當時の大學に對しては、かかる觀念形態としての人文主義が一つの「實在的」役割を果したのであつた。しかも「世界」觀は、單に觀念的なものではなくて、世界現實と人間と文化との三つの基本契機を、世界現實からの基體的限定を反映しつつ、三一的に統一するものであるから、もし世界觀としての（從つて廣義の）人文主義をその成立した基盤をも含めて捉えるならば、我々は必ずしも觀念論に陥るとは云えないであらう。ところでその基體的限定は各國の世界現實の特質によつてその性格を異にするのであつて、その結果各國における人文主義の發現形態は互にかなり異つてゐる。しかしその形態の

相異は、右の三つの基本契機のいすれに重點を置いて三者が統一されようとしたかによつて、類型的に區別することができらばあろう。さきにも云つたようにイタリアでは三者が云わば混然の一體性において統一されたのに對して、ドイツではより多く文化形態に、フランスではより多く人間個體に、イギリスではより多く國民的現實に重心を置いて三者を統一しようとした。

かように人文主義は西歐四國において夫々發現形態がちがうのであるが、しかもルネッサンスにおいて自己を自覺的に回復した個體的人間の天賦の能力、即ち *humanae* の多面的開發と調和的完成をもつて、人間生存の究極的意義として強調する點では高度の共通性を示している。『*homine universale*』としての『*homine unico*』こそは、ルネッサンス人文主義の人間理想 (*Menschentum*) であり、同時にまたその教育理想 (*Bildungsideal*) でもあつた。しかしそのロマニタスのとらえ方がまた四つの國においてかなり異つてゐる。相異の由來は後に述べることをして今は結論だけを言ふと、イタリアでは、ロマニタスは、雄辯が獨特の實在性を持ち得るような社會的政治的現實と、雄辯が更に美的に昇華された詩としての精神的文化的形態とに、直接な自己實現を見出した。ドイツではロマニタスは宗教的神秘的なる『*Seele*』をもちに含む『*Geist*』の深さにおいて自覺せられた。フランスでは『懷疑的』の『*esprit*』に於いて自己の自在を生きる個人の『*culture*』が『*In nature humaine*』を志向した。イギリスでは個人の *human nature* は『*common sense*』によつて國民的社會的生活を生きる人間の實踐的な『*public character*』として實現された。

以上のようなお互の相異にもかかわらず、ルネッサンスの人文主義は中世のラテン語的世界主義的文化を否定的に媒介しつゝ、しかもこれを破る方向に新しい人間の國民的文化を創造していつた。何よりもまず國語が公的文化的表現において使用されるようになり、國民文學が誕生し、その他の様々な文化領域に國民的性格が刻み出されていつた。しかも單なる國民的閉鎖性においてではなく、一方では世界現實における世界史的普遍性によつて、他方では科

學・藝術・宗教等に表現される普通人間性 (Allgemeinmenschheit) によつて常に開かれていた。従つてまた人文主義を最初の發現形態とする近代文化は、中世の無限なる普遍に對する單に有限なる特殊を中心原理としたのではなくて、特殊の有限を破る人間的主體の動的主體性を通して無限的普遍への世界觀的志向性を内に潜めていた。

さてその世界觀は哲學的形而上學的形態においては、一面ルネッサンス期にも一應の完成に達しつつ、しかも他面ではより以上の前進的な近代的發展への potentiality を潜在せしめていた。先づドイツでは巨大なるクザースを生み、エラスムス、フツテン、メランヒトンを通じて、人文主義は宗教改革へと連続して、遠く十八世紀から後のドイツ觀念論を指さしている。フランスではラメーやモンテーニュ、サンシユス、シアロン等において、人文主義は一つの頂點を極めつつ、しかも十七世紀のデカルトを志向し十八世紀のルツソーと呼應している。イギリスでは例えばトマス・モーアにおいて、人文主義は十七・八世紀的啓蒙の政治哲學と理神論とへの落差を高めている。イタリアの人文主義は右の各國の人文主義を觸發しつつ、それ自身においては、例えばカルダノ、テレシオ、パトリチ、ブルーノ等の自然哲學が、十七世紀から飛躍的に發展しはじめた近代自然科学への豊かな可能性を培つている。

さて右のようにルネッサンス期の一般的動向を概括した上で、當時の大學の狀況に目を注ぐ時、我々は兩者の間の餘りにも著しい間隔に目を眩らざるを得ない。大學はいぜんとして中世的スコラ主義の牙城なのである。だから人文主義者の多くは大學への激しい輕蔑と反感と憎惡とを示した。スコラの傳統主義と抗争しつつ人文主義が大學の中世的結晶をある程度まで融解することに成功したことは、後に述べるとおりであるが、しかしルネッサンスの人文主義がその固有な教育理想を最もよく實現し得たのは、むしろ中等教育機關においてであつた。概括的に言えば、中世末期が大學の成立した時期であつたのに對して、ルネッサンス期は獨・英・佛において中等學校がその理念と内容と形態とを整へ初めた時期であり、宗教改革期は初等普通教育の觀念が確立された時期であつた。

中世に初等・中等の教育機關がたかつたのではない。それどころが大學が發生した十二・三世紀は、修道院に據る僧侶の教育獨占がしだいに崩壊して、教育が世俗的の學校の手に移つて行つた轉換期であつて、多くの西歐諸都市には、ギルド學校 (guild school) 市民學校 (Junker school, Bürger-schule) 乃至都市學校 (town school, Stadtschule) 其他私立學校が設立されたのであつた。その多くは初等程度であつたが、ルネッサンス期には中等程度にまで成長したものが少なくなかつた。この事實が都市市民層の興隆を物語つてゐることは、例えばドイツにおいては經濟的に最も進んでいたネーデルラントに初めて、眞にその名に値する中等學校が成立したことによつても分るであらう (Barth, Die Geschichte der Erziehung, S. 219 ff. Schmidt; Geschichte der Erz., Bd. 2, I, S. 309-332)。さてこの市民層は、政治的封建制度と不可分に結びつく貴族制度の被壞者として立現されたのであるから、その教育機關たる中世末の世俗的諸學校は、所謂市民生活が必要とする minimum essentials を充たそうとするものであつた。しかし市民層は、その社會的地位が上昇するにつれて、近代の十八世紀まで殘る社會的封建制のもとに維持された貴族の社會的特權に對する優位權欲とも云うべき要求によつて、自らの「貴族性」を「贅澤」か「教養」によつて示そうとしたのであつた。さてその時、詩と雜辯との人文主義的教養は、贅澤の非倫理性を防ぐ「修辭學的倫理化」の役割を果したのである、とパウルゼン (Paulsen) は「キヤンパン」著書 (Janssen; Geschichte des deut. Volkes, Bd. 1) を引用して述べてゐる。(vgl. Paulsen; Geschichte der scholischen Unterichts, Bd. 1, S. 171 ff.) 當時の中等學校の多くは、こうした要求を持ちはじめた市民層 (財産貴族) や、從來の血統貴族、更にまた官職貴族のための教育機關であつたと云えよう。要するにその本質において「教養貴族主義」(Bildungszucht) の性格が強い人文主義は、すぐれて貴族主義的な中等學校の成立を促がしそれに新しい陶冶理想を與えたのであつた。

さて右のように教養貴族主義的陶冶理想を掲げるに至つた中等學校は、更にその教養的貴族性を高めんがために高等教育との連絡を求めたのであつた。殊にその上級三學部において官職貴族を養成する一つの大きな役割を擔つていた大學は、新興市民層の貴族主義的欲求を充たすものであつたであらう。遂に大學の方も後に述べるように、それの準備課程 (preparatory course) として中等學校の整備を要求するようになった。かくてルネッサンス期には大學と連絡する新しい中等學校が、人文主義的教育の理念と内容を以つてその形態を築いたのである。ドイツでは

Gymnasium, ノランズでは collège, イギリスでは public school がこれである。

以上の概観を前提として、西歐諸國のルネッサンス期における人文主義と大學との關係について簡単な考察を試みよう。

二 イタリアの大學

一般の經濟史・政治史・文化史が描くイタリア・ルネッサンスの巨視的考察に終始するなら、人は大學には一顧だにせず、この時期を通過するかも知れない。初期資本主義の發展、活潑な政治的諸事件、そして取分け華麗な文學・美術・哲學の開花、近代科學への萌芽とした萌芽、そして數多の "uomo singolare" の活躍、こうしたエポック・メイキングな時代の動向は、ペトラルカ初め當時の人文主義者等によつて、「實りなき朽木」にも等しい "barbaric" なラテン語をもつて「辯證法的な議論と屁理窟」とに目を送る「自惚れた無知の巢窟」として嘲られ蔑まれたスコラの大學の固い結晶を、どのようにして融解して行つたのであろうか。

一言で言えば、新しい世界現實の進動と新しい文化活動との、云わば交叉面としての上流社會での社交 (Geselligkeit) が、かの融解素を醸酵せしめた。即ち、擴大されて行く地理的世界、そこに擴充されて行く遠距離商業の中心たる諸都市、初めの民主制から商業貴族の専制へ移行して行つた政治、そこで練磨げられる獨特の僭主政治、コンデイトーレの放恣なる跳梁、「都市國家」間のマキアヴェリズムの外交や戦争、伸長する都市的自由と個性的思考、追放者が醸す世界市民主義的雰囲気、自由市民の擡頭、——こうした現實において、法王・宮廷・貴族・文藝愛好的市民を中心として形作られる社交界の生活家風氣こそ、時代の動向を集中的に表現して、中世的スコラの古めかしさを人々に直覺せしめるものであつたのではなからうか。そして今や社交の中心は「莊重な學問的スコラのボロニア」ではなくて、夢想的文藝的プラトニックな「インレンツォ」である (Ruschdall: *Medieval Universities*, I, p. 68.)

そこでは「personlicher Vortrag」以外の「N. Mithet」をも認めない近代的生活の雰囲気があつた。
 (Bruckhardt; *Kenntnisse in Italie*; V. Die Ausgeleichung der Stänke) その「Vortrag」は何よりもまず人文主義的「教養」(Bildung)であつて、そこには教養貴族主義が自ら發生した(vel. Prodttsch; Ges., Schr. IV. 56. 276)。しかし十九世紀初のドイツ新人文主義の教養がすぐれて觀照的であつたのに對して、イタリヤの人文主義は、「書簡作成と公的な儀式的演説」のために「共和國や諸侯や法王等」が實際的に人文主義者に要求したものであつた。(Bruckhardt; op. cit. III. Reproduktion des Alfortuns) その公けの仕事が要求するのはまず修辭學的教養であり、これは何よりも勝れた雄辯として實現せられるであろう。しかも雄辯は「藝術品」(Kunstwerk)としての政治的現實(vel. Bruckhardt)においては一つの實在であり、「歴史的政治的現實の形態」(vel. Gussner; Freiheit und Form, S. 6)をとつた人間の支配的意志の現われであつた。そしてかかる形態とならんで、人文主義的教養は、「精神的理念的形態」(M. M. O.)においては詩として發現した。しかも雄辯も詩も共に、あの「人々よりも優れようとする大いなる望み」(Lo gran disio dell eccellenza) 近代的名譽、カッシーラーによれば、「世界を支配」せんとする「自我」の「自我意識の力と確信」の反映であつた。(M. M. O.)

イタリヤ・ルネッサンスの狹義の人文主義は、後の新人文主義者(例えばフンボルト)におけるように哲學的世界觀まで深められたものであるよりも、教會的權威に反抗する「個人の自由と自力」とが實感される生活現實から生まれた一つの人生觀的態度であつたと云えるであろう。しかし實はそれ故にこそ、そこから生活的實感をもつて一つの教養理想(Bildungsideal)が刻出されたのであつた。即ち「poesis et eloquentia」(詩と雄辯)の教養を完成せる「poeta et orator」(詩人と雄辯家)になることこれである。しかも一たび教養理想が特定の社會層に對して支配的となるや、その社會層に屬する人間たちは、その理想によつて「型付けられる」(prägen)ことによつて、その社會で自己を「特權付ける一つの資格」(Berechtigung)を得ようと願うのが人情の自然である。(vel.

Jaspers; Die Idee der Universität; S. 7-8) かくて貴族は子女の家庭教師として人文主義者を邸宅に招き、一方では大學 (sapiantia) もまた高等教育機關として、社會的上層のこのような欲求 (social want) に應えなくてはならぬ。

人文主義者の反撥にもかかわらず、イタリアの大學は發生の頭初からルネッサンスへの胎動を示しており、また「片戀」的戀慕を人文主義に寄せていた。(vgl. Baurh, a. a. O.) またフイレンツェ大學が一三六〇年にはギリシア語教師ピラト (Pylao) を迎え、十四世紀末にはギリシア人クリソロラス (Chrysoloras) を招き、ソルニ (Bruni) をローマ文學の教授に任命し、十五世紀前半にはコシモ・デイ・メデイチ(一三八九—一四六四)の保護奨励のもと、大學は繁榮の極に達して、法王の延臣さえも連る講壇においてアレティノ (Arethino) フォン・レルンフォ (Fildfo) とが相競つたのであつた。そしてフイレンツェに倣つて、ローマ・パドヴァ・ナポリ・ミラノ・パヴィア・マントヴァ・ヴェロナ・フェララ・ボローニャ・ウルビノ・リミニ・ジェノヴァ等の各大學もまた「高給を以つて」人文主義者を教師として迎えた。ブルックハルトは、イタリヤ・ルネッサンスの文化に對する古代の影響は、「人文主義が諸大學を征服すること」を前提としたときと述べている。(Burekhardt; op. cit. III, Universitäten und Schulen) 殆んどこの世にも大學はしばしば "social law" の故に貧りなき朽木と溼まれたが、しかもその組織的教育によつて時代の欲求を反面から充しているのもあろうか。

しかし右のような人文主義の外見的繁榮を見て、人は直ちにイタリアの諸大學が近代化されたかのように思つてはならない。「一般に當時の學問的報告を(具象的に)想ひつかへるためには、現代の大學制度から出来るだけ目を離さなくてはならない。個人的交渉、様々の(中世的)討論、ラテン語の常用、又少からぬ人々の間でのギリシア語の使用、そしてまた教師の頻繁な更迭や書物の稀少さ等が、容易には我々が想像できないような姿を當時の大學に與えていた。」(Burekhardt; a. a. O.) しかのみならず大學は都市の、しかも貴族的上層のみの大學であつた。そして

上層をも含めて社會一般にはなお中世的傳統が重く立ちこめていた。迷信があり狂言があり、宗教審問がしばしば行われた。占星術があり錬金術があり、人は七の天の實在を信じた。しかも十五世紀末頃から商業の中心が北方に移動しはじめ、人文主義的教養をそこで雄辯術的實在性を發揮し得た都市の「歴史的現實」は衰退して、人文主義は單なる「精神的觀念的形態」のなかに不毛化していつた。今や十六世紀の人文主義の詩と雄辯とは、かの悪評高きシネロ主義 (Cynicismus) の言語 (至上) 主義 (Verbalism) とに陥つたのである。ところが狹義の人文主義が衰退し初めた十六世紀こそは、ルネッサンスが古典的古代の再生を媒介としつつ自らの主體生命から發する、創造的ルネッサンスの文化を美術や哲學の領域に生出した時期であつた。ブルックハルトは人文主義者の餘りにも早い凋落の原因として、彼等の數多い個人的な缺點を數えて見る。(op. cit., III. Sturz der Humanisten im 16. Jahrh.)

しかし例えばトゥレルテュが宗教改革と對比してルネッサンスの一つの特徴として擧げた「社會的形成衝動と成形力」の欠如と貴族主義的個人主義との故に、人文主義者は、「人氣取りの本能」で動く「支配權力」に全く依存して「薄い教養層」にのみ根を張り得たにすぎなかつたことを、彼等が早くも凋落したことの最大の原因と目されるべきであらう。ともあれ大學は再び新たなる言語主義的スコラ主義をそのなかに導入し、生産的ルネッサンスの運動から疎外された實りなき營みを續けざるを得なかつた。

たしかに全體として見られたルネッサンスの華麗に比較して、大學の影はかなり薄かつた。しかし當時の哲學者・科學者・その他學者達の經歷を調べる勞をいとぬ人は、ドイツ、殊にフランスやイギリスと比べて、イタリヤでは著名な人々と大學との關係がかなり密接なことに氣付くであらう。しかしそれにも拘らず文藝や學術の中心が、官廷や社交團體にあつたことは否定すべくもない。ここで特に我々が注目すべきはアカデミーの出現である。メデイチ家のフィレンツェに新プラトン主義者ブレトン (Platon) の盡力によつて一四四四年に建てられたプラトン・アカデミー (Accademia Platonica) がその最初であつて、外にナポリにテレシオ (Tellesio, 1485-88) が Accademia Telusiana を建て、一四六〇年には人文主義のローマ・アカデミー (Romani-

na Academia di storia e di archeologia) が立ち、ボルタもまた一五六〇年にナポリに自然科学アカデミー (A. scientifico naturale) を建てた。イタリアに次いで十七世紀の西歐諸國には幾多のアカデミーが創立されて、十六世紀後半から十八世紀末まで沈滞を續けた大學に代つて、これらのアカデミーが高等學術機關として大きな役割を果したのであつた。それについては章を更めて詳述しよう。

ここで私見を一言しておきたい。大學が中世以來、アリストテレス主義の牙城であつたのに對して、アカデミーはその名稱からも、またその最初がプラトン・アカデミーであつたことからも分るように、プラトン主義に系譜をひいている。再生的ルネッサンス期の哲學の二大潮流のうち、プラトン學派の人々 (プレトン・パツサリオン・フィチノ等) はアカデミーに據り、アリストテレス學派の人々 (カザ・ヴェルニウス・アキリヌス・ニフス・ビコロミニ・バルバロ・トマニウス・ボンボナツツイ等) は大學で活躍した。十八世紀にドイツのハレとゲットティンゲンの兩大學がプラトニズムの精神に通ずる "libertas philosophandi" によつて近代的大學への發進を開始したことは、アリストテレス主義に立つスコラの「傳道」主義を超えて、大學がプラトンの「アカデメイア」的研究を自己の一つの本質として自覺して始めて、眞實の大學となり得たことを示している。

三 ドイツの大學

中世末以來のハンザや南部諸都市の商業振興によつて、十五世紀半から十六世紀半にかけて所謂フツガー時代を現出したドイツには、十三世紀にすでに第三身分の解放が初まつたネーデルランドを通じて、その「共同生活の兄弟團」の人文主義的學校で育成されたヴェツセル・アグリコラ・ヘギウス等によつて、イタリアの人文主義がもたらされた。そしてフツテン・エラスムス・メランヒトンその他多數の人文主義者がこの時期のドイツには輩出した。これらの人文主義者は個人的な交渉や思想的交流を通して (vgl. Dilthey: Ges. Schr. IX, S. 131-140) ドイツ固有の社會的思想的民族生活の上に、新しい人文主義的・宗教的な生活理想を發展的に形成して Sitten (vgl. Dilthey: ;

(Fos. Selar. II, S. 39-53)、「ルネッターの宗教改革を準備した。

現世を樂しみ生きる近代人のルネッサンス的生活感情は、「ドイツ人文主義者の體内にも燃えた。フックテン (Ulrich von Hutten, 1488-1523) は、「人々の魂は醒めたり、生くるは樂し」と云い、「おま世紀、おま學問、生くるは喜びなり」と叫んだ。(Jaspers: Die geistige Situation der Zeit; S. 8) 現世的生活を樂しみ生きる人文主義者達の魂の底にはしかし、反王應的なドイツ的國民感情が奔騰し、更にその奥には中世以來のドイツ神祕主義の“Seele”が潜んでいた。かくてドイツ的人文主義は國民的・宗教的な Gemüt の底からフマニタスの完成を求めたのであった。その生活感情は從つてイタリアのそれとはかなり異つて、「現世享受的な正直な敬虔」(wahrhaftige, seriöse gewöhnliche Frommigkeit-Dilthey, II, S. 53) の感情であり、それが求めたフマニタスの完成は、「純正な人間の眞實な普遍的教養」(Castro: op. cit. S. 11) の完成であつた。これを更に哲學的世界觀的に見れば、純正なキリスト教的魂と古典的人間性との究極的統一を目指す「宗教的普遍主義的」(汎神論的)有神論 (religös-universalistischer Theismus-Dilthey, II, S. 45) であつた。それはまたプリストテレスにおける自然哲學としての「神論」とキリスト教的「神論とのフマニタスによる、(多かれ少かれ新プラトン主義的な)統一であつたとも云えよう。(vgl. Dilthey, IX, S. 137-140) の統一を“ratio”的に徹底し、“docta ignorantia”まで究極していつて、フマニタスの古典的形相をも超える無限なる大宇宙を内に全收する小宇宙として人間の本質を思辨したのがクザリウス (Nicolaus Cusanus, 1401-1465) であつた。しかし大學や中等學校の教育理想を規定した狹義の人文主義は、ラッイオよりも言葉を重視し (non ratione, sed oratione)、傳統的な「三科」(Trivium) たる文法・辯證法・修辭を、中世的スコラ主義から解放して、古典的原型において先ず復活した。そして古典的理想の「模倣」(imitatio) を中心とする所謂形式陶冶 (formale Bildung) によつて、併せて人間の智慧 (sapientia) を陶冶しようとした。そして純正な古典語の學力と正しい智慧とによつて聖書の本姿に接して正純なキリスト教的敬虔 (Fides) を目覺まそうと願つ

た。かくて「*Manichaeus*と「*Aristoteles*主義とキリスト教とを統一する人文主義の陶冶理想は、メランヒトンに從つて「*sapiens et eloquens pietus*」の二句に集約せられるであらう。

狹義のドイツ人文主義は右のような陶冶理想にまで發展すべき可能性をうちに潜めつつ、南と西とからドイツの諸大學に進入し、中部ドイツにまで滲透した。殊に十五世紀後半すぎに新設された諸大學は初めから人文主義に對して好意的であり、特にウイッテンベルク大學（一五〇二年創立）は人文主義的な選舉侯フリードリッヒの保護のもと、總長シュロイル（*Schneur*）によつて、一五〇七年にはイタリアに勝ると誇稱する新しい教科課程を設け、一二年からはルツターが神學部教授となり、一八年にはメランヒトンが文科の教授に任命された。人文主義の侵入に初め抵抗したエルフルト大學も、コンラド・ムート（*Conrad Muht*）等の努力によつてドイツ人文主義の中心たるの觀を呈するにいたり、ライプツィヒ大學にも、フッテンの師エスティカンピアヌス（*Aesticampianus*）に續くモセラヌス（*P. Mosellanus*）によつて、一五一九年にはアリストテレス哲學と修辭學と詩學の課程が設けられた。またマインツ大學はアルブレヒト大僧正のもとフッテンによつて人文主義を入れ、保守主義の牙城ケヨルン大學にもイタリアの人文主義者が入つた。ウイーン大學の人文主義的傾向は特に強く、マキシミリアン一世のもとで、早くも一四九三年には詩と雄辯の講座が設けられ、桂冠詩人コンラド・ツェルティス（*Konrad Celtis, 1459-1490*）その他が講座を擔當した。九九年には文科の人文的課程を擴充して、人文科目（*arte humanitatis*）の一部を必修とし、一五〇一年には遂に「詩學部」（*collegium poetarum*）が設置された。（但し六〇名中一二名が専攻）ハイデルベルク大學はアグリコラ（*Agricola, 1453-1530*）や著名な人文主義的教育學者ウィムフェリク（*J. Wimpfeling, 1450-1538*）等を引き、後者が總長であつた一五二二年には學則を人文主義的に改革し、二三年にはブシウス（*H. Buschius*）をラテン語の詩と雄辯の教授とした。

右の素描から分るように、ドイツ人文主義の主要な舞臺はイタリアと異つて主に大學及び學校であつた。それはすぐれて學者的學校的な運動であり、卓絶した少數學者の問題であつて、この意味で「スコラ」的であつた。従つてまた、その社會的役割は大きくなかつたにせよ、「スコラー」の身分たるスコールス（學徒）が學ぶスコラ（學校）に對しては少からぬ影響を與え、陶冶理想や教科課程のみならず、教育組織をさへ變革し初めた。その影響は一般教

養の課程を擔當する大學の文科に對して最も著しく、その課程を言語學的・哲學的に近代化することを促した。しかも前記のような言語優先主義の故に、古典語學習課程の年限が延長されるに伴い、やがてその課程の大半は大學準備課程として形態を整えはじめたギムナジウムに委讓されることになつた。

メラニヒトンを初めとする人文主義教育者達によるギムナジウムの發展整備は宗教改革期以後に屬する。さて中世以來ドイツ大學の文科はむしろ中等程度にすぎなかつたのであつて、この課程の大半がギムナジウムに委讓されたことは、ドイツ大學が眞の大學程度にまで高まつて行くことを意味し、同時にまた一般教養的人間陶冶機關よりも學術的教授機能に重點を置くことをも意味する。然らば一般教養的人間陶冶機關としてのギムナジウムの性格はどのようなものであつたかというに、一般教養の三要素たる社會的・人間的・學問的教養のうち(本誌三七二號、五頁)、言語學的な學問的教養に決定的な重點が置かれ、從つて人間生命と世界現實との聯關から切離された言語主義の不毛性に趣く傾向を初めから擔つていた。しかし古典語によつて學習される文化的古典世界をこそ眞の「實在」と信ずる人文主義者にとつては、その傾向は必ずしも不毛性の徴候ではなかつた。彼等は古典的な人文主義的教養によつてこそ“duplex cognitio rerum ne verborum” (物と言葉とを統一する知識)が陶冶せられると信じた。だがその「物」は“adaequatio rei et intellectus”とらう場合の、科學的知性に合致する實在的な物ではなくて、單に名によつて示される言語的な「物」にすぎない。從つてまた“rerum cognitio potior, verborum prior” (言語的知識がより先で、物の知識がより重要)と云う場合にも、一般の教育史家が考えるように、直ちに教育上の實在主義(Realismus)を意味するものと解することは出来ないと思われる。ともあれかように著しく觀念的言語主義的な知識論と學習論とに基いて行われたギムナジウムの教育は、近代の世界現實と科學文化とから疎外されざるを得ない運命を初めから擔つており、それを準備課程とする大學の「スコラ」的性質をいよいよ強化したと思われる。かかる言語學的授業が何等かの教育的役割を果すためには、人間との内面的結合を回復しなければならぬ。その結合を企てたのが十八世紀後半から興起したドイツ人人文主義なのである。

四 フランスとイギリスの大學

ドイツでは宗教改革（一五一七年）によつて人文主義の發展に新しい契機を加える一つのエポックが劃されたのに對して、新教の傳播がややおくられて社會的政治的事件を招來したフランスとイギリスとでは、十六世紀後半にまで人文主義的ルネッサンス期は伸びている。

特に百年戰役後飛躍的に伸長したローマ・カトリック教の強固な傳統と結びつく王權、による中央集權性と比論的に、強固なるスコラ神學の本據パリ大學が諸教育機關の中心に聳え立つフランスにも、市民階級の興隆に伴つて、一五世紀三〇年代頃から人文主義が進入し、一四七〇年初めて、パリ大學でギリシア語を教えたティフェルナス（Tiphernas）の後繼者ヘルモニモス（G. Hermeninos）のもとから、ロイヒリンやエラスムスと共に、フランス最大の人文主義者の一人であるブデ（Guillaume Budé, Budaus, 1467-1540）が現われた。しかし「パリ大學神學博士」の授與をもつて全歐に聞えたソルボンヌを初め、一五〇〇年までに五〇を算えたパリのコレギウムは、「最もひどい悪液に感染した體と澤山の害虫とよりほかに何も得られなかつた」とエラスムスを耶喻せしめた程の沈滞に陥り、スペイン最大の人文主義ヴィヴェス（Juan Luis Vives, 1493-1540）をして「學業や老婦人が掛け合ふ謎」にも等しい空論に目を送ると非難せしめた「似而非辯證家」の本據であつた。（Schmid: Geschichte der Erziehung; N. 2. S. 78.）しかもヴァロア・オルレアン朝の宮廷は古典語の習得をルッター主義として精疑した。

かくて人文主義者ブデはソルボンヌやナヴァレのコレギウムに見切りをつける外はなかつた。恰もその時、國際政局の變動によつて、カール五世と對抗するためドイツ新教徒と結び、自らも學術愛好者であつたフランソア一世（一五一五在位）が、「未婚の少女である哲學の持參金」として與えた資金によつて、一五三〇年ブデは遂に、パリ大學とは全く獨立に、コレージュ・ド・フランス（Collège de France）を創立し、「ミネルヴァとミニエーズの神殿」ならしめようとした。この事實は正に「既知的傳統的な學識（savoir）の分類ではなくて、新しい認識（connaissances）を推進」せんとする時代の精神を示すエポック・メイキングな事件であつた。（cf. Bréhier: Histoire de la philo-

sophie, I, p. 738, Diltz; Gros. Schr. II, S. 36) キリシブ・ラテン・ヘブライ語の文法、修辭、辯證法、算術、幾何の課程が置かれ、フランス語で授業が行われた。一五五一年には反プリストレス主義のためパリ大學を追われたラメー (Pierre de la Ramée, Petrus Rannus, 1515-72, カルヴィン派に改宗、バソロミニューに虐殺さる) が、哲學と雄辯學とを講じ、コレージエの名聲はよりよ上つた。パリ以外の地方の人文主義的コレージエとしては、コレージエ・ド・ギヨヌ (C. de Guyenne, 通稱 Schola Aquitanica) が著名であつて、パリのコレージエ・ド・サンバルブの校長が來任して、カルヴィン派の M. Cordier と共に、ドイツのシュトゥルムのギムナジウムに似た人文主義的改革を行つた。(vgl. Moog; Geschichte der Pädagogik, S. 10. 2-3) このコレージエからモンテーニエ (Michel de Montaigne, 1533-92) が出た。

ラメーとモンテーニエとは當時の思想界と大學とを支配したスコラ的プリストレスの權威に對するフランスの近代精神の反擊者である。宗教改革の洗禮を受けつつある初期の前進的思想を共に代表しているのであるが、ラメーは古典的古代の肯定的精神の再生を求める點ではなお一般の人文主義と高度の共通性を持ち、モンテーニエはその否定的懷疑的精神を復活させることによつて更に近代を一步前進せしめた。もちろん肯定的精神の復活にも、古代への主體的共感に裏付けられたものと、言語主義的模倣に終始するものがあるが、いずれにせよかかる形態の人文主義が、西歐各國のルネッサンス期の中等・高等教育に陶冶理想を興えた。近代論理への萌芽を藏しつつもなお修辭主義の根を破れなかつたラメーもそれ故に (vgl. Cassirer; Das Erkenntnisproblem, I, S. 130-5, Windelband; Gesch. d. neueren Phil. S. 19 f.)、所謂「Rationalismus」として、ドイツの人文主義教育者シュトルムを通じてドイツのギムナジウムの教育理論にも影響した。これに反して、モンテーニエに始まる近代的懷疑は、古典的古代をも懷疑した古代末期の懷疑論を復活することによつて、人文主義の「imitatio」的な直接的肯定性と、その目指すフマニタスの調和的完成像とを分裂 (Spaltung) さす近代的批判精神を、主體的個人のなかに自覚せしめた。従つてそれは、何等かの意味で客觀的文化財の傳達という機能を果たす教育機關とは、人文主義のような直接的聯關を持つことができない。モンテーニエの「エッセー」

(Essai) は、所謂客觀的研究ではなくて、自己自らを試みる (essayer) 自己による、自己そのもの、自己の本質 (mon essence) の自覺を、自在に表現したものに外ならない。しかもこの自己は、ストア的自足 (ataraxia) の自在なる主體性をもって、宇宙の分化と多様 (diversité et variété) を試みつつ、「人間の自然 (本性) (La nature de l'homme) を追求しようとする」精神の限りなき探索 (une enquête infinie d'un esprit cf. Béhier, op. cit. p. 760-5) に生きつづけ、自己の底にストア的宇宙的自然を自覺した。そこには小宇宙との相即を自覺する汎神論への方向があるが、クザリヌスやブルーノの汎神論におけるように實體的なる普遍の方に優位が置かれるよりも、「宇宙の主」となる人間個體が世界觀の中心に立つている。ともあれモンテーニュは、サンシユスやシャロンと共に、主體的懷疑精神においてデカルトを先驅し、その「自然」概念はルッソーを志向する。そして「學校的」教育理論を超える人間精神の探求によつて、程多き近代的教育論を語り、學校の肯定的人文主義教育をたえず人間個體の主體的生命によつて裏付ける「學校外的」發達を提供した。ルネッサンス末期に形態を整えはじめ、その後幾度かの變遷を経て現代フランス學制の中等教育機關の主體をなすリ、セーとコレジエとにおいて陶冶理想として掲げられる「culture générale」²⁾ (cf. Kandel: Comparative Education: p. 564, 653, 675, 683, 718) モンテーニュ的・デカルト的 esprit に裏附けられた humanisme の教養なごではなからうか。カッシーラーの言葉を少し變えて云えば、「(理性的な) 自然への復歸」を志向する「自我の眞實な内的自主性」の「美的 (理性的) な生活形式の新しい教養」と云えるかも知れない。(Vgl. Cassirer: Freiheit und Form: S. 10-11)

「無知とスコラ主義とが暗黒化をめぐつて競い合う。この世なる當夜の國」とイタリヤ人が嘲つたイギリスの大學にも、十五世紀初頭のコンスタンス會議いらい、ポジョ・エラスムス・ヴィヴェス等の來訪や、自國人のイタリヤ遊學等によつて、人文主義がしだいに進入し、大陸諸國におけるよりも強固な根をイギリスの社會的・文化的・生活のなかに下していつた。十三世紀初頭には大憲章を王に承認させ、成長する國民主義のもと法王に代る國王の主尊性が伸長し、また十五世紀初めには攻勢に轉じた世界貿易によつて、ヴェニス使節をして「ヨーロッパのどこの國の富よりも

大きい」と語らしめる繁榮を招來し、裁判官フォータスキュー(一三九四—四七六)をして、「イギリスでは人民の意志こそが生ける最高のものであり、政治體の頭から手足にまで血液を送つてゐる」と自負せしめる程に、イギリスには近代の“public life”が成長しつゝあつた。表面的華麗さはイタリヤに及ばなかつたにせよ、一度人文主義が進入するや、ドイツのようにそれ自體としての限り學校的な問題に止まることなく、フランスのように本質的自巳の洗練の方向に傾くだけでもなく、近代化を進めてゆく社會に生きる社會的人間の“public character”の陶冶に對しても、少からぬ役割を果した。

エラスムスは一四九七年に渡英してケンブリッジでギリシア語を教え、オックスフォード最初のギリシア語教授グロシン(William Groyn, 1446-1515)や、ケンブリッジ出身の反ローマ教會派のラティマー(Hugh Latimer, 1451-1535)と交際した。彼が特に親しくしたオックスフォードの教授コレット(John Colet, 1466-1519)は、パリとイタリヤに遊學して新プラトニ主義に感動し、キリスト教的敬虔と古典的な雄辯と知慧とを統一せんとする自己の陶冶理想に基いて、一五二二年頃にロンドンに St. Paul's School を立てた。ほかに著名な人文主義教育學者としては、王室に出入したメリオット(Sir Thomas Elyot, 1490-1546)、ケンブリッジの教授で王女エリザベスの王室教師であつたアムカム(Roger Ascham, 1516-48)の著“*The Schoolemaster*, 1570”はイギリス最初の人文主義教育學書)、また初めギルド學校として有名な Merchant Taylor's School の、後にはセント・ポールの校長となつたマルカスター(R. Mulcaster, 1580-1611)等がある。

イギリスでも人文主義は中等學校に最大の影響を與えた。ルネッサンス期以前の中等學校としては、オックスフォードのウィウ・カレッジの創立者ワイカム(William of Wykeham)がそのの豫備校として立てたウインチェスター・カレッジ(Wincchester College, 1383)、ヘンリー四世が設立したオックスフォードのキシグス・カレッジの豫備校たるイトン・カレッジ(Eton College, 1440)等があつたが、セント・ポールの設立以來これと同系統の所謂“public schools”が相次いで新設され、右の三校の外、Shrewsbury (1552), Westminster (1560), Merchant Taylor's (1561), Rugby (1567), Harrow (1571), Charterhouse (1612) の六校、計九校が九の“Great public schools”と呼ばれてゐる。いずれも國家や教會から獨立に、私人の寄附や

王室の財産によつて立てられ、一般のパブリック・スクールよりも程度が高く、人文主義的一般教育によつて、オックスフォード・ケンブリッジ兩大學への貴族の豫備教育を施してきて、十九世紀半すぎまでその傳統的形態を殆んど變化することなく持續し、今日でもイギリス中等教育の主軸をなしている。

ここに我々が特に注目すべきは、これらの中等教育機關が社會的貴族制を背景として、支配者階級たる所謂 *Upper classes* の “public character” の訓練を目標とし、しかも支配者に必要な言語的雄辯術的陶冶のために、人文主義が極めて實踐的實際的役割を果したことである。かかる中等學校を準備課程とする兩大學の教育理念がまたこの方向を指すのは當然であろう。

かくてイギリスの人文主義は、上層市民社會の生活への “common sense” 的な根差しを得た。一見すれば超常識的なモーア (Thomas More: 1478-1535) の *Utopia* (De optimo rei publicae statu, deque nova insula Utopia, 1516) も、根柢には極めて強い實踐的意志をひそめており、やがて啓蒙における自然法學や理神論へと展開せらるべきイギリスの近代性の強い萌芽を持つべきである。(vgl. Dittley: *Ges. Schr.* II, S. 49, 106f, 268, 273, 323, 423; Windelband: *Ges. d. n. Ph.* S. 36f.)

X X X X X

近代前期に歐洲諸國が所謂ヨーロッパ世界的な *Staatensystem* のなかで夫々の *Nationalität* を發展的に形成していつたように、各國の大學もまた中等學校との聯關において夫々の國民的特質を刻出していつた。「大學には國民の魂が反映する」と語つたイギリスのホールデン卿の言葉を引用して、アメリカのフレクスナーが、「だから(各國の)大學を一つの型にはめ込もうとすることは馬鹿氣している」と述べた時、そこには西歐の大學の歴史の傳統に對する深い理解が示されている。我々はここで我國の新制大學への轉換について色々のことを考えさせられるのである。

(此の項完)